

【論文提出者】 社会文化科学研究科 文化学専攻
英語教授学領域
佐取 美紀

【論文題目】

The Role of Working Memory in L2 Listening Comprehension
(第2言語聴解における作動記憶の役割)

【授与する学位の種類】 博士(文学)

【論文審査の結果の要旨】

本論文は L2(第二言語)聴解における作動記憶(WM: Working Memory)と短期記憶(STM: Short Term Memory)の役割を検証することが研究目的である。この研究目的は、以下のリサーチ・クエスチョンにおいて表されている(これらのリサーチ・クエスチョンは、更に詳細な多くの下位のリサーチ・クエスチョンとして提起されている)。

1. 作動記憶容量の個人差は、全体的構成概念としての L2 聴解に影響を与えているか。もし影響している場合には、作動記憶容量の役割は L2 能力のレベルにより異なるのか。
2. 作動記憶容量の個人差は L2 の言語知識と処理技能に影響を与えているか。もし影響しているならば、作動記憶の役割は L2 能力のレベルにより異なるのか。
3. 作動記憶容量の個人差は、L2 聴解の字義的かつ推論的側面の両方に影響しているのか。もし影響しているならば、作動記憶の役割は L2 能力のレベルにより異なるのか。
4. LST (Listening Span Test)におけるエラーのタイプは、低レベルの聞き手と高レベルの聞き手で異なるのか。L2 聴解との関係において、LST におけるエラーは作動記憶システムとどのように関わっているか。

本論文で使用されている重要な理論的モデルには、WM と STM (Baddeley, 2007)、Anderson (1985)により提起された聴解処理の3段階モデル、O' Malley, Chamot and Kupper (1989)の聴解方略モデル、主要な先行研究で用いられているトップダウン・ボトムアップ処理モデル(Lynch, 1998; Rubin, 1994; Vandergrift, 2004)、作動記憶に関する注意制御モデル(Engle et al, 1999; Engle, 2002)と埋め込み処理モデル(Cowan, 1999)、その他のモデルが含まれている。本論文は先行研究におけるこれらのモデルに適切に関係付けられており、これらのモデルの側面の測定に関する筆者の注意は厳密かつ妥当である。また、本論文は L2 能力が低レベルの聞き手に関する L2 聴解と作動記憶に焦点を当てている点で独自性がある。

第1章は序論で、第2章(先行研究)は聴解、作動記憶に関するモデルを包括的に検討している。第3章(研究方法)は参加者、測定用具、データ収集・処理の手順を述べている。第4章—第10章は3つの予備的研究、4つのメインスタディから成っており、これまで7編の単著論文の発行に寄与している。第11章では最後の考察と結論が述べられている。

データ分析は適切に行われ、確実に妥当性のある結論が導かれている。統計処理は、得点分布分析、クロンバック α 、T 検定、ANOVA (分散分析)、回帰分析を含む適切な統計手法を用いて行われた。

本論文は多くの個々の研究から構成されており、研究結果も多くなっている。特に、4つのメインスタディの研究結果は次のとおりである。メインスタディ A は、作動記憶容量が、初級と上級の聞き手の両方に対して、短期記憶容量よりも重要な役割を果たしていることを実証した。この研究結果は本論文において最も意義があると考えられる。また、メインスタディ B は、作動記憶容量が上級の L2 の聞き手の高次処理技能に、また、初級の L2 の聞き手の低次処理技能に関係していることを明らかにした。メインスタディ C は、作動記憶容量が、高レベルの L2 の聞き手の推論的理解に、また、低レベルの L2 の聞き手の推論的・字義的理解に影響を与えていることを立証した。メインスタディ D は、LST

の再生エラーを検証した上で、低レベルのL2の聞き手は高レベルのL2の聞き手よりも、音素の侵入と遅延侵入のエラーが多いことを実証した。

全体として、本論文の水準と当該分野への貢献は高く評価できる。

以上により、本論文が博士(文学)の学位を授与されるための十分な資格を有していると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成25年1月18日(金)に実施された。最初に本人から学位論文の概要に関する発表が英語でなされた後に、英語による口頭試問が行なわれた。本人により、学位論文の成果及び関連領域の専門的学識と研究能力に基づいて、応答が十分かつ適切になされ、申請された学位論文が博士の学位の授与に値する水準にあることが確認された。

よって、本審査委員会は最終試験を合格であると判断した。

【審査委員会】

主査 アイズマンガー イアン

委員 山下 徹

委員 ラスカウスキー テリー

委員 積山 薫

委員 バウアー トビアス